

重度の肢体不自由と知的障害を併せ有する重複障害児の共同活動に関する事例的研究 —係わり手との相互作用に視点をおいて—

川上 萌

I 問題と目的

重度・重複障害である子どものコミュニケーションにおいては周囲の人とともに取り組む活動（共有する活動）が持ちにくいことから、周囲とつながることは乏しくもあり、困難である（土谷, 2006）。

土谷（2006）は、子どもと係わり手が活動を共有することで、一体感や喜びによる情動の共有が生まれ、その経験が喜びに満ちたものであればあるほど、子どもの行動は、その経験を踏まえた表出となり、能動的、自発的、創造的なものになる（土谷・菅井, 2000）としている。

また、松井（1980）は、障害のある子どもとの係わり合いにおいて音楽が多く使用される理由として、音楽の非言語コミュニケーション手段として比較的容易に使用することができる点を挙げ、音楽そのものがコミュニケーションとしての意味をもち、音楽的対話といえるような現象が現われるということを指摘している。

音楽を伴うコミュニケーションとして、「BED-MUSIC」技法が挙げられる（松井, 1989）。この「BED-MUSIC」技法は治療者と子どもが共同作業で音楽を創造していく意味合いが強い（土野, 1997）という指摘がある。

以上のことから、重度の肢体不自由と知的障害を併せ有する重複障害である子どもを対象に、共同活動の観点から音楽活動に取り組むことが、係わり手との相互作用を促進する上で有効であることを事例的に明らかにすることを目的とした。

II 方法

1 対象児

A 特別支援学校に通う、重度の肢体不自由と知的障害を併せ有する男児 Y（小学部 4 学年）を対象とする（以下 Y）。対象児は、視覚障害と診断されていないものの、視覚に困難があると推測される。ひとり遊びに終始しがちで、他者と何かを一

緒に楽しむという経験にも乏しい。音楽に合わせて笑う様子や、メロディーに合わせて声を出す様子が見られる。

2 資料収集及び分析の方法

20XX 年 12 月から 20XX+1 年 7 月までの期間に A 特別支援学校の教室で週 1 回のセッション（全 15 セッション）を実施した。ただし、そのうち 1 セッションは Y の体調不良のため分析の対象からは除いた。

係わり手（以下 K）は対象児に対し、オーシャンドラム、キーボードを提示し、楽器遊びにかかわった。

ビデオ記録をもとに音楽活動全体のトランスクリプトを作成した。三宅ら（1974）、前田・小林（2000）、BED-MUSIC 技法（松井, 1989）を参考に Y の動作・発声、K の働きかけ・受け応えを分析するためのカテゴリーを作成し、カテゴリー表（表 1・2）を用いて、Y の動作・発声、K の働きかけ・受け応え、Y の表出（視線、身体接触、発声、笑顔の生起）を分析した。

表 1 Y の動作・発声

	定義	例	先行研究との関連		
			三宅ら	前田・小林	BED-MUSIC
応答・同調	相手の行動を受けて、応答・同調する	k が太鼓を叩くと、y が声を出す。K がキーボードをひくと y が手を叩く。k が太鼓を提示すると、y が太鼓をたたき、K が太鼓を立てると y が太鼓を叩く。	同意・共鳴		
模倣	直前の相手の行動（=演奏）のまねをする	k が太鼓を叩くと、y が太鼓をたたき、K が太鼓を引っ掻くと y が太鼓を引っ掻く。	反復・模倣	模倣・協調	モデリング
再現（変換）	係わり手と行った直前の行動を再度別の形で行う	k とハンドアンダーハンドで太鼓を叩くと、重なっていない方の手で太鼓を叩く。	反復・模倣	模倣・協調	同質技法
主張	自分のしたいことをあらわす	k が太鼓を叩くのを避けるように、k が太鼓を叩く。	意思・主張		
歌う	相手の働きかけに対し、受け入れ、自らは歌で表現する	k が曲を歌うと、y が歌う。K がキーボードをひくと y が歌う。	同意・共鳴	模倣・協調	同質技法
情動表出	相手の行動を受けて自らの情動を表出する	k がキーボードを弾くと笑う。K が話しかけると y が笑う。	感嘆		内的表出
係わり手への接近行動	係わり手である k に対し、身体接触を行う	k がキーボードを引くと y が k の手に顔を乗せる。K が太鼓を叩くと、y が k の手に手を重ねる			内的表出
受容	係わり手の呼びかけに対し、返事をするかのように発声、行動する	k が話しかけると、y が声を出す。K が太鼓を叩きながら y の名前を呼ぶと y が声を出す	受容・承認		

表2 Kの働きかけ・受け応え

	定義	例	先行研究との関連		
			三宅ら	前田・小林	BED-MUSIC
同調	相手の働きかけに対する同質的受容	yが太鼓を叩く行動に合わせて、kも一緒に太鼓を叩く。yが太鼓を叩くと、kが太鼓を叩いた回数を数える。	同意・共鳴	受容・了解	同質技法
模倣	直前の相手の行動(=演奏)のまねをする	yが太鼓を叩くと、kが太鼓を叩く。yがキーボードをひくと同じ音をkが弾く。	反復・模倣	模倣・協調	モチリング
変換	相手の行動を受け入れ、自らは別の行動で応答する。	yが手を叩くと、kは太鼓を叩く。yが発声すると、kは和音をひく。	受容・承認	行動提案	対話
提案	相手の行動を受け、別の活動を提案する	yが太鼓に耳を当てながら声を出すと、kが太鼓に口を当てながら声を出す。yがkの指をつかむと、kは一緒に太鼓を叩く	提案・誘い	行動提案	対話
表出確認	相手の表出を確認する	yが掌で鍵盤をたたくと、kはyの手を撫でる。yが笑うとkはyの頬に触れる。	確認	行動評価	対話
翻訳	相手の行動に対するフィードバックをする	yが太鼓を叩くと、kが感想を言う。	同意・共鳴	行動評価	反響技法
明確化要求	問いかけ	yはkを見ると、kは「なあに？」と聞く。yが発声するとkは「取ったの？」と聞く。	質問	明確化要求	
状況の説明	状況を説明する	yがkの手を叩くと、「Kの手だね」と声を掛ける。yが太鼓を叩くとkが「今太鼓を叩いているね」と言う。	説明	教示・説明	対話

III 結果と考察

1 係わり手への接近行動について

係わり手への接近行動は、生起時間が増加した(図1)。このことから、共同活動としての音楽活動は、Yの係わり手への接近行動を促進し、Yの自発性・能動性を培う上で意義あることであったと推察される。さらに、Yが他者に関心を持ち、気持ちに向けているという時間を増加させただけでなく、継続的に他者へと接近する状況を作り出す上でも有効であったと考えられる。

2 主張について

Yの主張の生起時間は減少したが、応答・同調の生起時間は減少しておらず、係わり手への接近行動に関しては増加傾向にあった(図1)。このことから、Yの主張の減少は、ただ単に受動的になったのではなく、共同活動としての音楽活動の蓄積により、他者であるKの行動や声かけに注意を向け、同調することができるようになったということが推察される。

また、図2に示した通り、後半のセッション10~14においては、Kの提案の生起回数が多かった。また、図1に示したように、セッション10~14は、

Yの主張の生起時間が少ない。このことから、Kは、Yの主張の減少を受けて、共同活動としての音楽活動のなかで提案をすることができるようになったのではないかと考えられる。

さらに、図1に示したようにYの主張においては、セッション11以降、大幅に減少している。このことから、Yはセッション10において、他者の提案を受け入れて、同調していく面白さを学習した為に、以降、Kの提案を受け入れて、主張を減少させていったのではないということが考えられる。

3 情動表出について

Yの情動表出は全体的に増加する傾向にあった(図1)。また、笑顔の生起時間も増加している(図3)ことから、喜びや楽しさなどの情動表出が増加したと考えられる。

4 Kに向けられた視線

YのKに向けられた視線に関しては、セッションによる変動が大きかった(図3)。このことから、Yは視線をつかって他者に伝えることが少ないのではないかということが推測される。

5 身体接触

身体接触の生起時間は増加傾向にあった(図2)。また、情動表出の生起時間も増加しており(図1)、笑顔の生起時間も同じく増加している(図2)ことから、共同活動としての音楽活動を重ねることにより、Yは係わり手であるKと、触覚を通して高まる正の情動を共有していったということが考えられる。

6 笑顔

笑顔の生起時間は共同活動としての音楽活動を重ねるにつれ徐々に増加した(図3)。また、図1に示した通り、Kへの接近行動の生起時間は増加しており、身体接触の生起時間も同じく増加している。したがって、共同活動としての音楽活動を蓄積することにより、Yは喜びや楽しさを伴った笑顔を多く表出できるようになったこと、そして、Yが喜びに満ちた時間を多く過ごせるようになったということが推測される。

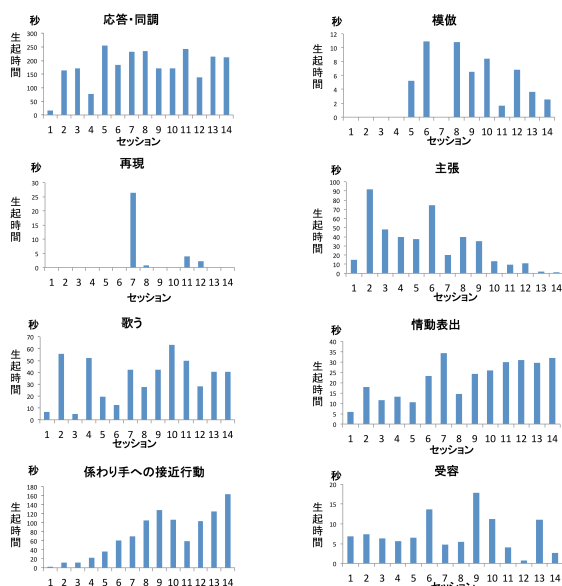


図1 YとKの相互作用について
—Yのカテゴリ別生起時間の推移—

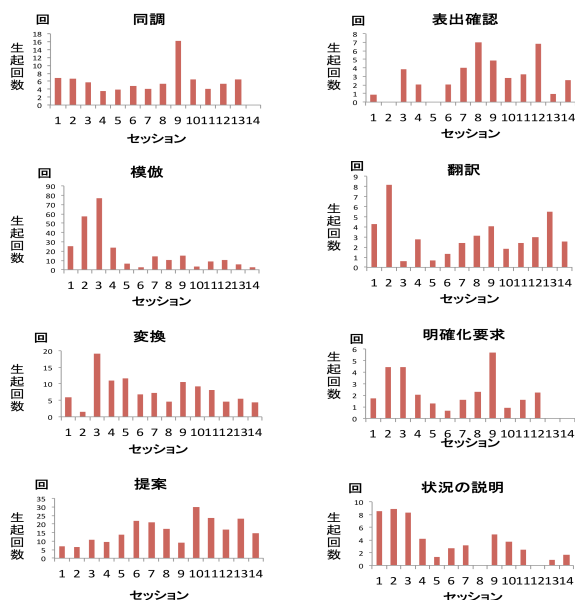


図2 YとKの相互作用について
—Kのカテゴリ別生起時間の推移—

また、Yの笑顔の生起時間の増加は、共同活動としての音楽活動により、本児が他者であるKを信頼した上で、喜びや、一体感をともに得、笑顔を見せる時間が増えていったことを意味していると考えられる。

7 発声

図1に示した通り、発声の生起時間はばらつきがあった。しかし、全14セッションのなかで、セッション5・7・10の発声の生起時間が突出して

いることが分かる。特にセッション5では初めてKによるキーボードを用いた曲の演奏を取り入れた。すると、Yは曲の演奏開始時には、まるで何かに気づいたかのように「オウ」と発声したり、演奏の進行にあわせて「データ」「アー」といった発声をしたりする様子が見られた。このことから、Kが曲を演奏するという意外性と、Kが演奏した曲のメロディーがYの発声を誘発したのではないかと考えられる。

また、前半は発声が増加したものの、後半は生起時間の増加が見られなかった。しかし、図1に示した通り、応答・同調が減少しなかったこと、係わり手への接近行動が増加したことから、発声が増加しなかったのは、活動に消極的になったり、拒否反応を示したりしたことの表れではないことだと考えられる。

特に、Kの曲の演奏の導入以降は身体接触の生起時間が増加したことから、Yは発声に重点を置かず、Kと身体を触れ合わせながら音楽を楽しみ、情動を共有していたのではないかと推察される。

8 楽器別の比較

本研究では、打楽器であるオーシャンドラムと、キーボードを使用し、共同活動としての音楽活動を行った。結果、図4に示した通り、Yの表出は、キーボードを使用しての活動の方が、多いということがわかった。

特に、身体接触の生起時間の差が顕著であったが、キーボードを使用することにより身体接触を引き出しやすい要因として考えられることが2つある。

まず一つ目に、キーボードはメロディアスな楽器であるという要因が考えられる。このことから、本児の情動に応じた語りかけに似たやりとりが、より細かくできたのではないかと推察される。

二つ目の理由として、キーボードは、Yが多様に活動に取り組める楽器であったからということが考えられる。KがYに対して活動を提案したり、メロディーでYを誘い出したりしたことが、結果的に、Yの身体接触の生起時間の増加を誘発させ

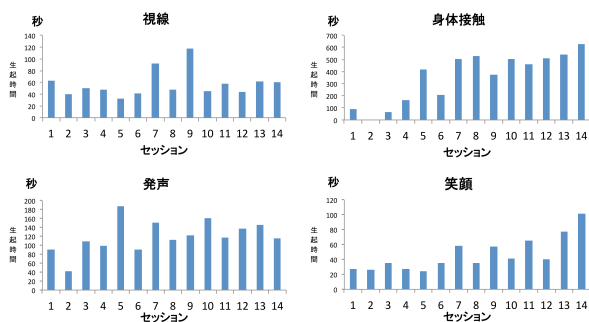


図3 Yの表出の生起時間の推移

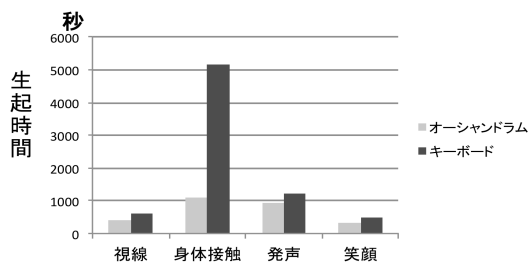


図4 Yの全セッションを通した楽器ごとの表出

る状況を作り出すことができたのではないかと推察される。

以上のことから、本児の表出を高めるにあたり、キーボードがより有効であったことが考えられる。

IV 全体考察

相互作用に関する検討の結果、共同活動としての音楽活動に取り組むことによって促進されたコミュニケーションの観点は次の3点が挙げられる。

一つ目に、Yによる係わり手への接近行動が増加したことは、Yが活動を自己完結させるのではなく、他者とともに共有することへの気づきを促すことができたことと捉えることができたことを示している。

二つ目に、Yが活動時の主張を減少させ、Kと同調できるようになったことで、自身の行動と相手の行動とを重ね合わせて、自己調整する力を付けることができたということが考えられる。Yは共同活動としての音楽活動の中で、他者の存在に気づき、相手の行動を待ち、自らの行動をおこすことができるようになった。また、自身の発信のみでなく、相手の行動を受信し、それを楽しむことができるようになった。

三つ目に、Yの情動表出が増加したことにより、他者に気持ちを表現することの楽しさを知ることができたということが考えられる。Yが表出を高めていったということは、笑顔、身体接触の増加からも窺える。YがKとの共同活動としての音楽活動を重ねるにつれて、他者が自身の表出を受け止めてくれるということの安心感に気づき、「もっと相手に伝えたい」という思いをもつことができたのではないかと考えられる。

本研究では、Yと係わり手であるKとの音楽活動における相互作用について検討を重ねることによって、共同活動としての音楽活動が、KとYの相互作用を促進する上で有効であることが明らかとなった。

しかし、本研究では係わり手はKひとりに限定されており、他の大人や友達と活動を共有するには至らなかった。Yをとりまく環境は日々変化するものであり、Yはこれからもたくさんの人と生活をともにすることになる。その中で、より多くの人と活動や情動を共有することがYの生活を豊かにするものであると考えられる。今後は、Yが係わり手に拘らず、様々な相手と活動を共有していく方策を明らかにしていく必要がある。

文献

- 松井紀和 (1989) 音楽療法. 伊藤隆二 (編). 心理治療法ハンドブック. 福村出版, 478-530.
- 土野研治 (1997) 情緒に問題のある子どもとの音による係わり. 国立特殊教育総合研究所重複障害研究部 (編) 重度・重複障害の事例研究 (第二十集) —「音との係わり」に視点をおいて-, 15-20.
- 土谷良巳 (2006) 重症心身障害児・者とのコミュニケーション. 発達障害研究, 28 (4), 238 - 247.
- 土谷良巳・菅井裕行 (2000) ネゴシエーションの視点からみた初期的コミュニケーション—先天的な盲ろう二重障害におけるコミュニケーションをめぐる—. 国立特殊教育総合研究所紀要, 27, 77-87.